

# 吉岡美国と敬神愛人（6）

井上 琢智

## VIII 「敬神愛人」思想の系譜——中村正直の「敬天愛人」と吉岡美国の「敬神愛人」——

吉岡が好んで揮毫した「敬神愛人」の思想的系譜をたどり、吉岡の思想の一端を明らかにすることが最後の仕事である。その際留意すべきは、すでに指摘したように「敬神愛人」とともに「書」と但し書きを付けて吉岡<sup>1)</sup>が揮毫した「敬天愛人」の思想の系譜をたどることが必要であろう。というのは、この「敬天愛人」の字句こそ中村正直<sup>2)</sup>（敬字）によって用いられ、西郷隆盛によって世に流布した字句だからである。

元昌平饗儒者中村正直は、一八七四（明治七）年二月二五日、カナダ・メソヂスト派の宣教師コク克蘭（George Cochran, 1834-1901）<sup>3)</sup>によって洗礼を受け、キリスト教徒となり、布教活動にも積極的に参加した。

アイルランド生まれのコク克蘭は、幼年期にカナダに移住し、正式な大学教育を受けなかったものの、学問を好み、一八五三年ウエスレアン・メソヂスト教会の牧師を経て、トロントのメ

トロポリタン教会の牧師となった。一八七一年のカナダ・ウエスレアン・メソヂスト教会伝道会社年会の決定にもとづいて、一八七三年六月に、医学博士マクドナルド (D. MacDonald, 1836-1905) とともに来日し、横浜に滞在した。一八七四年一月には、マクドナルドは東京で宣教活動を開始したが、静岡の英学校「賤機舎」の英語教師に招聘され、一八七四年四月から二年契約で英語を教えた。<sup>(4)</sup>

他方、横浜で宣教活動を行っていたコ克蘭は、一八七四年一月四日、横浜の一致教会で「精霊の人格及び其の事業」という礼拝説教を行い、夕方には「万国福音同盟会」の初週祈禱会が催された。<sup>(5)</sup> この会合に中村は東京から出席し、コ克蘭に質疑を行った。これが機縁となり中村は、コ克蘭に「何れの町、いづれの村に入るとも、その中にて相応はしき者を尋ねいだして、立ち去るまでは其処に留まれ」(マタイによる福音書、第一〇章第一一節)、「健やかなる者は医者不要せず、たゞ病めるこれを要す。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて来たれり」(マタイによる福音書、第九章一二節〜一三節)との聖句をあげ、「先生もし枉げて拙宅に御住居ひ候はゞ、御教訓を下し玉はずとも必ず先生の良き感化を蒙る事信じ候」(二四六頁)と書き、中村が経営していた小石川の同人社に英語教師として彼を招いた。

以後、コ克蘭は毎土曜日に上京し、日曜日には聖書の講義や説教をするようになり、<sup>(6)</sup> さらに同人社構内の新築洋館に居住するようになった。その後、コ克蘭から受洗した平岩愼保(その他、伊勢(横井)時雄、山崎為徳らが受洗している)のついで牛込津久戸前町へ移転し、さらに築地居留地明石町四番館へ移り、宣教活動を続けたり、聖書和訳委員も勤めた。このような宣教活動が活発になるにしたがい、新たに一八七六年にはG・M・ミーチャム、C・S・イビーが

横浜に送られてきた。その中で、一八七九年三月になってコ克蘭は帰国した。

『敬字文集』（第三卷、一九〇二、吉川弘文館）において、中村は「人材の育成という実践的課題を優先し、その方法として士は徳行道芸を身につけていなければならないこと、儒は世務を知り、吏は治道を知ることとを必要条件とすること、さらに文武両道を身に付けねばならないこと、士は専門分野を治めて、終始変わらないようにさせること」<sup>(7)</sup>などを提案していた。その儒者中村にとって、洋学も「天地人三才に通じることの一つとして学者が扱わなければならない」<sup>(8)</sup>学問であった。というのは「洋夷の長ずる所は六あり」として天文、地理、算数、器機、航海、医術に求めるなど「東洋の道德、西洋の技芸という見解」<sup>(9)</sup>を当時の知識人と同様抱いていたからであり、そのためオランダ語をひそかに独学で学び、英語を箕作圭五に習っていたという。<sup>(10)</sup>

#### 一 「留学奉願候存寄書付」

「留学奉願候存寄書付」<sup>(11)</sup>（一八六六）では、さらに一歩進めて中村は、西洋の学を性霊の学（人文社会科学）と物質の学（自然科学）とに分け、後者だけでなく前者もまた西洋で学ばなければならないと、留学の必要性を説いた。その年秋になって、中村正直は川路寛堂とともに幕府のイギリス留學生の取締役として渡英した。そこで中村が経験したのは「イギリスの政治をダイナミックに動かし、世界最大の経済を發展させ、最強の軍事力を維持し、産業革命を先導的に遂行していったイギリス国民の精神を根本から支え、それに生命を与え、生き生きと活動させている原動力が『天を敬し人を愛する心』にあり、『上帝に仕え、礼拝を尊び、持経を尚び、好んで貧病の者を調済』するキリスト教にあると見抜いた」<sup>(12)</sup>のである。

このようにイギリス文化を肯定し、その文化を開花させた原因をキリスト教に求めた中村は帰国後、キリスト教と正面から取り組まざるを得なくなった。最初にキリスト教を学んだのがアメリカから物理学・化学の教師として静岡学問所に赴任してきたクラーク (E. W. Clark, 1849-1907)<sup>(13)</sup>であった。その結果、一八六八年に書いたのが『敬天愛人説』であり、翌年書いたのが『請質所聞』であった。

## 二 『敬天愛人説』

中村は「天」を「朱子学の天即理というような自然法則的原理と道徳的原理の両面を背中合わせに抱えもった非人格的原理」ではなく、「天が人間を生んだ父である」という意味で、創造的的人格神的性格<sup>(14)</sup>と捉えている。この点は「『天は上帝の別名』であり、『皇上帝』ともいわれる人格神的存在だ」と<sup>(15)</sup>考えた陽明学者中江藤樹の思想やキリスト教の神観に近い。一方、「創造神的天を父にもつ人間同士は、天に対して兄弟姉妹という家族共同体を形成」するが、「キリスト教の神人関係は、父子関係といっても、実は契約による義父義子の関係」であるのに対して、中村の「神人関係は、儒学的血縁関係であり、契約以前の関係を含み、儒学的文脈を離れることはできなかつた」<sup>(16)</sup>のである。さらに、中村は帰国後も熱心に聖書研究会に出席することでキリスト教の理解を深め、「神への愛と隣人への愛を一緒に説いたイエスの愛の思想に深く共鳴し、キリスト教の愛の思想に基づいて儒教的敬天と愛人とを結合させることができた」<sup>(17)</sup>。それにもかかわらず『敬天愛人説』にはキリスト論がないことから明らかなように、「神への愛、隣人への愛といっても、キリスト教の説く、アガペーの愛を理解したとはいえない」<sup>(18)</sup>し、「書経に見られる『天

道善に福し淫に禍す』という儒教的応報主義からキリスト教の罪観を解釈<sup>(19)</sup>している。この儒学的応報主義は中村の生涯を通じて維持されており、それが晩年にキリスト教から離反させる理由となった。<sup>(20)</sup>

### 三 『請質所聞』

このように『敬天愛人説』が儒学でいう愛敬によって神人関係を解釈し、神と人間に向かって人がいかなる原理に基づいて行為すべきかを問うという実践的見地から論じられていたのに対して、『請質所聞』<sup>(21)</sup>は神と人の存在がどんな関係にあるかを問うという存在論的見地から神人関係を論じている。具体的には中村は、第一に神を「在らざるところなく、能わざあるところなく、知らざるところなし」と表現することで「偏在・全能・全知」として捉えている。第二に神を「至大無外、至小無内」と表現することで「無限の神」と考え、神を天地創造の神としても捉え、さらに神を「賞罰黜陟柄」<sup>(22)</sup>を握る、すなわち「裁きの神」と捉えているが、すでに指摘したように書経の「天道善に福し淫に禍す」を典拠に裏付けている。ただ、中村のこの裁きの思想にはこの世の行為善悪いかに重視する考え方が含まれており、それは「人間が正しい行為をすることができなくても、神の救済の働きを認めようとする正統派キリスト教の福音思想と矛盾する意味を含むこと」<sup>(22)</sup>になり、中村が『生命論序』（一八八四）を書くことで、正統派キリスト教から離脱することになる。さらに『敬天愛人説』とは異なり、「天」と「理」とを明確に区別する姿勢がみられる。「天」は「全知、全能、偏在にして創造の神」であるが、「理」は「天によって活かされる存在にすぎない」<sup>(23)</sup>し、その「神」も中村にとって、人間に内在する神であり、人間は自己

を顧みるから直ちに神に出会う道が開かれていることから、キリスト教の「人間を超越した神」ではなく、それゆえ「神」と「人間」との「仲保者キリスト」の存在を必要としない考え方であった。この考え方は、朱子学の居敬の方法に近く、彼が晩年傾倒したエマソン (R.W. Emerson) に近いものであった。<sup>(24)</sup>

#### 四 『天道溯原』

中村のキリスト教観を知るために不可欠な資料は丁躰良ことマーティン (W.A.P. Martin, 1827-1916) 『天道溯原』<sup>(25)</sup> (一八五四) である。中村が訓点を付したからである。この書物について「マーティンは、本書を通して中国伝道を志していたから、中国の主流を占めていた儒学的伝統を充分に用いて、キリスト教の教義を述べようとしていた。そこで、仏教と道教に対しては、偶像を作り、人心を脅かすにすぎないと批判した。その一方で、儒教に対しては、仏教や老荘の思想より優れているとしている。ただ、儒教は『人をいいて神に及ば』ない点が不完全であるといい、キリスト教は、人に対する五倫の道に加えて神に対する倫理である首倫を主張する点で、儒教を含み、かつこれを越えた教えである」という。<sup>(26)</sup>「こうした神への首倫として、これに事えることが敬天であり、人への五倫が愛人である」という敬天愛人思想は、この『天道溯原』の中に見出され、その典拠として「マタイによる福音書」第二二章三七節から三九節までが引用されている。<sup>(27)</sup>

五 中村正直と「天・上帝・神」概念<sup>(28)</sup>

小泉は『敬天愛人説』、『請質所聞』、『天道溯原』に現れた超越者概念の頻度を調査することで「敬宇の超越者概念が天から、上帝<sup>(29)</sup>へ、また神へと次第に推移」していると指摘し、『天道溯原』では「天地は万物の寓居である物理的宇宙を示し、天、真神から厳密に区別」されているのに対して、『敬天愛人説』、『請質所聞』では「天、神と一体化している存在として天地は意味されている<sup>(30)</sup>」と指摘している。加えて、『天道溯原』では鬼神、魔神、偶像、神像は真神から厳格に区別されているが、『請質所聞』において中村はようやく上帝を鬼神や偶像から厳格に区別することで、鬼神や偶像をも神とする日本の神概念をキリスト教の神と明確に識別するようになった。しかし、『天道溯原』に見られる「耶穌基督」、「基督」、「神子」などが中村に見られないのは、<sup>(31)</sup>「三位一体の神の中から、父なる神の上帝のみを受け入れたが、母なる『聖霊』と子なる『基督』に目をつぶった」からである。この中村の姿勢は「唯一の神のみを認め、キリストをあくまで人間と見たユニテリアニズムの神学と重なっている<sup>(32)</sup>」。

このような分析を通じて小泉は以下の結論を導いた。中村の「天命を信じ以て職分を尽くし、良心に従い以て境遇の変に応ずる有るのみ」という思想は、儒教の影響受けながら「天即上帝」を信じ、その信仰に基づいて、後は人事の職分を尽くせばよく、そこには「人間の罪を贖うために、キリストが神と人間との間の和解を果たそうとして働く」という思想は必要ではなかった。「敬宇の『敬天愛人』とは、文字通り天を敬して人を愛する、つまり上帝を敬して人事を尽くすだけでよかった。そこにはキリストは、始めから除かれていた<sup>(33)</sup>」。

## 六 「敬天愛人」のその後

中村の手を放れた「敬天愛人」の語句は、西郷隆盛の弟子が静岡時代に小書『敬天愛人説』を学んだことから西郷に伝わり、一八七五年以降西郷は盛んにこの語句を揮毫したため、西郷の四字が西郷のものであるかのように思われるようになった。<sup>(34)</sup> 揮毫だけでなく、西郷隆盛は「道は天地自然の道なるゆゑ、講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始せよ。：総じて人は己れに克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るゝぞ」<sup>(35)</sup>と書き、また「道は天地自然の物にして、人は之を行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふゆゑ、我を愛する心を以て人を愛する也」<sup>(36)</sup>とも書き、さらに「人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己れを尽て人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし」<sup>(37)</sup>とも書くことによつて、この「敬天愛人」思想を世間に流布していった。

西郷の「敬天愛人」思想は、中村正直の思想を換骨奪胎したものとはいへ、すでに指摘したように、その中村の思想の奥底に隠されていた世俗的教訓としての「天を敬し、自己が道徳的に修養して、社会に奉仕を行いさえすれば、天は人を助け、人は他者を助けることができる」<sup>(38)</sup>との考えを端的に示すものであった。確かに儒教の文脈の中にすでにあったこの敬天と愛人の思想は、キリスト教信仰の立場から統一的成句として作り上げようと苦悩していた中村とは異なり、キリスト教に直面していなかった西郷を含め当時の知識人だけでなく、一般の人びとにも受け入れやすいものであった。その証拠の一つとして挙げられるのが、教育勅語の作成過程での「敬天敬神」の扱いである。<sup>(39)</sup>

一八九三年五月一七日、明治天皇は芳川顕正を文部大臣に任命する際し、徳教に関する箴言の

編纂を命じ、いわゆる教育勅語の起案がなされ、具体化するに至った。六月中旬、中村は、芳川文部大臣へ教育勅語草案を進言した。そこでは「敬天敬神ノ心ハ人々固有ノ性ヨリ生ズ」と指摘<sup>(40)</sup>されていた。それは、すでにエマソンからの影響を受け、彼の合理主義とりわけ功利主義的合理主義や応報主義的思想立場から、中村が「儒教的な太極即神という見地に戻り、さらに太極が人間の性理に分與されてくるところから、人即神という神内在論の見地に立っていることを示して」以後ことであつた。<sup>(41)</sup>

それにもかかわらず、六月二〇日には、法制局長官井上毅はこの文部省原案とされた中村起草の「德育大意」を批判した。すなわち「此勅語ニハ敬<sup>レ</sup>天尊<sup>レ</sup>神之語を避けざるべからず何とはれハ此等の語ハ忽ち宗旨上之争端を引起すの種子となるべし」とあるように、中村は「天」や「神」を定義していないものの、教育勅語が宗教に介入したかの印象を与えることを井上が危惧したためである。まさに「日本の道德は皇祖皇宗が立てたもので、国体から発している」と考<sup>(42)</sup>える井上の立場からの批判であつた。そのため、教育勅語の起案は、中村から井上毅や元田永孚の手に委ねられたのである。

このように中村の手を離れ、西郷の手によって再び儒教の文脈からだけでも理解可能となつた「敬天愛人」思想が「代々国学者で忠君愛国の精神は、少年時代から人一倍嚴格に養われて来た」<sup>(43)</sup>人物からも受け入れられるようになっていった。その一例を、関西学院の中に見てみよう。それは、すでに指摘したように吉岡美国を恩師と仰ぎ、関西学院を母校と慕っていた永井柳太郎である。彼が「敬天愛人」の語句で語ろうとした思想は、クリスチャン中村の思想ではなく、あくまでも西郷の理解にもとづくものであつた。すなわち、一九二九年九月二八日に開催された関西学

院四〇周年記念式典で外務政務次官として永井は「敬天愛人敬神興国」と題して講演した。そこでは、吉田松陰やR・W・エマーソンの学校も小さかったことを例として、「学校は決してその歴史の長きことや又校舎の大であることを以て誇ることは出来ない。それは社会的に有用なる人物を輩出するか否かということである。そして今日の社会に欠如することは敬天愛人の思想である。之れなきが為め日本のすべての社会と方面とに欠陥が生じ弊害が出来てゐる。この点に於て、吾学院は飽く迄も敬天愛人を以てその教育精神としなければならぬ」と述べた。<sup>(45)</sup>

こうして、彼は一九三二年六月二〇日に訪れた関西学院で「敬天愛人」を「大心海」とともに揮毫した。<sup>(46)</sup> その意味について、永井は「西郷南州の、『人を相手にすることなく、天を相手とせよ』という言葉も亦、その根底に於ては、彼の『敬天愛人』の大信念に通ずるものがあつたことを忘れてはならぬ。天と俱に生くる者にとっては、不安、恐怖、嫉妬、憎悪がないのである」と。<sup>(47)</sup>

## IX 吉岡美国と「敬神愛人」——思想的研究——

思想家でなく「キリストの愛を實行した偉大なる教育家」で「熱烈なキリスト者」<sup>(48)</sup>であつたため著書をほとんど遺さなかつた吉岡のキリスト教思想を探ることはきわめて困難である。しかし、「敬天愛人を身を以て行はれたキリスト教徒」<sup>(50)</sup>であつた吉岡のキリスト教思想を彼の「敬神愛人」「敬天愛人」理解を字句を軸にして明らかにしていこう。もつとも前章(VII)の「吉岡美国と『敬神愛人』『敬天愛人』——資料的研究——」<sup>(51)</sup>ですでに指摘したように、その考察に際しては「敬天愛人」ではなく「敬神愛人」に吉岡が自らの思想を示そうとしたことを考慮する必要がある。

現在確認できる限り、吉岡が自らの信仰を表す字句として「敬神愛人」を最初に挙げたのは、一九一〇年四月二日発行の『護教』（第九七五号）の特集「応答集（一）」での発言である。このアンケートで「（一）貴下が生涯の標語とせらるゝ語、（二）貴下は聖書中何書を愛読さるゝや、又如何なる聖句を愛せらるゝや、（三）貴下は何を以てメソヂスト教会の特徴なりとせらるゝや」が質問された。その質問に対して吉岡は、「（一）敬神愛人、（二）約翰第一書、加拉太書等（特別に愛読す、（三）新生と聖化に重きを置くこと（教義上）、聯合組織 Connectionalism（教会政治上）」と答えている。このように吉岡は中村＝西郷の「敬天愛人」ではなく「敬神愛人」を自分の好ましい語句としたことは確かである。

もちろんこの「敬神愛人」の語句は、新約聖書マタイによる福音書第二二章三七節～三九節の思想を端的に表現したことは確かである。すなわち「律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか」との問に対してイエスが「最も重要な第一の掟」として「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」と答え、第二に重要な掟として「隣人を自分のように愛しなさい」と答えていることによる。従って、キリスト教徒である限りこの語句がきわめて重要な語句であることは確かである。

吉岡と「敬神愛人」との出会い、おそらく『護教』の「如何なる書籍に由て基督教の思想に接触せしや」との質問に対して挙げ、彼の旧蔵書（一八八〇年版）<sup>53</sup>にも所蔵されていた『天道溯原』であろう。中村正直訓点『天道溯原』中巻「以道之行爲証」（三七葉）によれば、「天父之誠有十而求其要旨愛神愛人兩端尽之」であり、丁隄良・嘉魯日耳士訳『天道溯原解』一八七五（巻之中、四三葉）によれば、「夫真神ノ誠十條アリ其要旨ヲ求ムルニ神ヲ愛シ人ヲ愛スル兩端ニ盡

セリ」とあるからである。このように考えると、中村が「敬天愛人」の用語を用いたのがむしろ不自然であり、吉岡が「敬神愛人」を用いたのが自然であったであろう。

関西学院以外にこの「敬神愛人」の語句を重視している例を挙げてみよう。例えば、本多庸一は、一八七四年一二月、アメリカのメソヂスト監督教会宣教師イング (Inge) とともに私立東奥義塾に着任し、塾長となった。正確な年代は不明であるものの、その頃揮毫したのがこの「敬神愛人」である。<sup>(54)</sup> また、一八八七年七月一日、アメリカのメソヂスト・プロテスタント教会から派遣されたクライン (F.C.Klein, 1857-1926) によって創立された私立愛知英語学校 (後、名古屋英和学校と改称した現在の名古屋学院) は、創立当初から校訓としてこの「敬神愛人」を掲げているが、その語句は、名古屋中学校が開設された際、奥野昌綱によって揮毫された。<sup>(55)</sup> また一八九二年一月に行われた東北学院開院式に際して神学校の講堂に掲げたのが巖谷修(一六)揮毫の「敬神愛人」の額である。<sup>(56)</sup>

このアンケートの前年の七月に、このアンケートを読んだと思われる関西学院神学部教授芦田慶治(一九〇二年九月就任、哲学担当、〇九年七月辞任、同志社へ転籍)は『関西文壇』掲載論文「宗教とは何ぞや」<sup>(57)</sup>を寄稿し「敬神愛人」に言及している。彼は「宗教とは、吾等が自箇の生涯生活に対して、無限の信任、尊敬、趣味、喜悦、希望を有する事なのである。自己経験に於て、人生の価値を認め、之を喜び、之を楽しむ所に在るのである」<sup>(58)</sup>と答え、「基督教なるものも、帰する所は余輩の所謂宗教でふもの、中に包括され」ていると結論を下したうえで、その「基督教には、『敬神』『愛人』の道を説く。『敬神』『愛人』は即ち基督教の根本義である。而して其敬神愛人の道とは……人生の価値に対する信仰(信仰と云へば無論、之より生ずる行為活動をも含む

のだ」と云ふ事になる。おのが一生の価値を認めればこそ、自己の無限なる可能性と自己の尊貴、自己の重要を認めればこそ、即ち自己其もの、中に、神の如きものを認めればこそ、無限の靈、天地の大精神、あらゆる生命の源頭『父なる神』を認めることができるのである」と指摘し、「敬神の念は、正に自己に対する敬虔の念から起つて来るのだ。而して愛人の教へも矢張り同様である」という。<sup>59</sup>この論文での芦田の主張は「宗教は人生の困苦を克服し、生の価値を見出していく精神力として把握され」、その「生きる力としての『靈的生命』であった」に過ぎず、「キリスト教的な罪の問題やそれからの贖罪を説く要素が薄弱である」。<sup>60</sup>

確かにこの頃の関西学院では、この「敬神愛人」の語句が、しばしば学内で唱えられたと思われる。例えば、同志社を放校されて関西学院中学部に編入してきた永井柳太郎（一九〇二年卒業）と同期となった中村賢二郎（一九〇一年卒業）の思い出によれば「十五歳の時に中村金次君の導きで原田の学院に入学し、神人愛とキリスト教の正義とを教え込まれた」「朝な夕なに敬神愛人を教え込まれたのであつた。うるさい程に宗教的の生活を経験させられた」<sup>61</sup>のである。

このように関西学院では、「敬神愛人」がキリスト教主義教育の一貫として教えられ、また時にはスクール・モットーとして普及していたことを踏まえて、夫婦の銀婚記念品に吉岡は「敬神愛人」の語句を書き入れた。一九一三年一月三日の日付が記された記念品である。さらに揮毫の日時は不明であるものの一枚の「敬神愛人」（「美国拜」、中学部本館玄関）書を挟んで、関西学院の一九三二年一月二〇日の日付のある「敬神愛人」（七十一翁 甲東、落款…甲東、吉岡美国、『関西学院新聞』大学昇格祝賀号）の揮毫がある。「甲東」の落款が印されていることから判断してこれよりも後に揮毫したと思われる日付不明の「敬神愛人」（甲東、落款…甲東、吉

岡美国、高中部礼拝堂横)の揮毫もある。<sup>(62)</sup>さらに一九三五年の段階でも「我校の標語は『敬神愛人』なり。神を敬信する者は其独を慎みて屋漏に愧ぢず。其行や公明正大なり。人を親愛する者は己に克ちて禮に復る。其心や忠恕寛裕なり」として、この「敬神愛人」の語句が「標語」として用いられている。<sup>(63)</sup>

このように吉岡が好み、関西学院の「標語」ともなった「敬神愛人」の語句について、その意味を詳細に論じた吉岡の文書は現時点では発見できていない。従って、吉岡が遺した文書を参考にしながら、吉岡がこの語句に込めた意味を可能な限り明らかにし、吉岡のキリスト教観を探ることにしたい。その際、参考にするのが、中村正直のキリスト教観である。主として小泉による中村の「敬天愛人」思想の検討を通じて得られたキリスト教観を探る視点は以下のものである。

①「神」は創造主であると考えるかどうか、②世界を無より造られたものと見るか、それとも質料(氣)としての世界はたえずあったと考えるか、<sup>(64)</sup>③「神」は「人間を超越した神」かそれとも「人間に内在する神」であるか、④「鬼神や偶像」を「神」と認めないか、それとも認めるか、⑤天地は天・真神から厳密に区別されているかどうか、⑥「仲保者」キリストは「神」か「人間」か、⑦神人関係(父子関係)が契約による義父義子の関係かそれとも契約以前の血縁関係であるかどうか、⑧「神」「隣人」への愛がアガペーの愛であるかどうか、⑨「神を信ずることによって救われる」という思想を認めるか、それとも「人の幸不幸は彼自身の道徳的行為のためである」と考えるかどうか。

吉岡のキリスト教への接近は、彼が京都府中学校在籍中に「西洋ノ智識ノ輸入ト共ニ我国ノ思想界ニ混乱を生ジ道德上ノ觀念ノ悪化スル傾向」を憂い、「西洋文化ニハ亦宗教ヲ伴フ事ニ着目

シ、西洋各国ノ宗教ノ事情ヲ研究」しようとしたためであった。その際「私はときおり人間以上の力を持った見えざる手の必要を感じ」たため、「母の教え（日蓮宗）に従って、信頼できる神々に助けを求め」、「仏教の説法を聞き、興味を持って仏教書を読んだ」が、「無味乾燥で命の輝きのない抜け殻のような仏教」<sup>(65)</sup>に不満を感じた。

「東洋の道德、西洋の技芸という見解」を抱き、その「西洋の技芸」の発展を支えていた原動力がキリスト教にあると見抜きキリスト教に接近した中村とはことなり、吉岡はその「東洋の道德」ですら「悪化」する現状を憂き、その「道德」の確立に心を砕いたといえる。

「道德」を重視する吉岡の姿は、「（W・R・）ランバス先生のことども」<sup>(66)</sup>に如実に現れている。「学者はともすれば徳性の如何はしい人もあるのですが、（ランバス先生は）至つて固い、道德の優れた、宗教上の信仰に就ては、天の父上を信ずる事固く、何物にも動かされぬ方であり」（二二頁）、「宗教上平素説いて居られる事は全部行為に現はれて、真に言行一致の方でした。この言行一致といふ事は中々難しい事で、偉い人にも、中々言行の一致できぬ人のあるものですが、（ランバス）先生は此の点に於て、大に感激させられるものがありました」（二三頁）として「有徳」「不言実行」の人ランバスを讃えている。もちろん、吉岡にとってランバスの偉さは彼の「信仰の篤さ」にあったことは間違いない。真の信仰とは「子供らしいのが真当で、聖書は説けても、理屈が云へても、砕けたる心で、子が親に仕へる心持」（二三頁）であるとする吉岡によれば、「堂々たる学者」であつたランバス先生は「信者としては、極めて可愛らしい信者で、理屈っぽく無い、幼児の様に信ずる、可愛らしい信仰でした」（二二頁）。従つて、関西学院の創立も「唯布教し、宗旨を広める」のではなく、「説教をなし、聖書を説き、精神の導きをなすと共に、日本の精神

界を導くために……一人前の日本人となる青年に、円満な教育を授ける」(二八―一九頁)ためであった。それが達成できないと「天に在す父上を十分に知る道が開けない」(一九頁)と考えるランバスを賞賛したのである。加えて吉岡に「基督教ノ権化」と映ったJ・W・ランバス(老ランバス)の「人格」にふれたことで、吉岡はキリスト教への信仰を得たのである。<sup>(67)</sup>

このような「子供らしいのが真当<sup>ママ</sup>で、……砕けたる心で、子が親に仕へる心持」を眞の信仰と考える吉岡の姿勢は「イエスの模範」という説教草稿にも現れている。「われ汝らに模範を示せり、わが為ししごとく汝等も為さんためなり」(ヨハネによる福音書、第一三章一五節)という聖句で始まるこの演説草稿で、吉岡は「イエスが吾々の模範であることと其倣<sup>ママ</sup>う為方を考えること」を説教した。

吉岡はまず「一大事実ハ新約聖書に示されたる言行の標準ハ戒律、規則でなく品性」であり、「遵奉すべきも此ハ実にイエスの言行の儀文に非ず、其靈即精神」であるとの立場から「汝らキリスト、イエスの心を心とせよ」(ピリピ人への手紙、第二章五節)と説く。従って「イエスが是認し給ふ処の言行を持つのが即真にイエスの模範に倣ふ」ことが必要であると。それではなぜキリストを「完全なる模範」とするかについて、彼は「先ツ有ゆる人間の中でイエスハ独り罪なき方」であるからである。<sup>(68)</sup>しかし、彼は弟子ペテロの「彼ハ罪を犯さず、其口は虚偽なし」(ペテロの第一の手紙、第二章二二節)との評価に対して、「寧ろ消極的の言ひ現し方で其(イエス)性格の実に円満、完全にして欠陥なき性格である」と指摘する。だからこそ「イエスハ実に吾々の大模範として仰ぐべき方であることを覚へる」と。

その上で吉岡はその「大模範に倣ふ」方法に言及する。第一にイエスの言行を知るために「基

督者よ、福音書を調べ給へ、福音書を調べ給へ」と。第二に「子供が習字の稽古」のように「イエスに倣ふ法（ママ）も全く是で『イエスを仰ぎ見る』（ヘブル人への手紙、第二章二節）ことである」と。この点を比喻を用いて説明する。「丁度日光の作用で物体の形が写真の種板に写せらるるが如く吾々も『主の栄光を見、栄光より栄光にすすみ、主と同じ像に化するなり』（コリント人への第二の手紙、第三章一八節）であると。是ハ超自然とハ申せ極めて自然の事である。幼児ハ親の所作を自然に見倣ふも此である」と。そのためには「吾々ハイエスと共に不断暮らして居らねばならぬ」。しかし、「イエスは完全無欠の模範である」とは分かつていても、われわれのような「此意志の弱き、罪にまけ易き身を以て倣ふようにとハ如何にして出来ようか?」、（ママ）「理想の高以のハ結構であるが、是に到達する途ハ如何」と問いただす。吉岡は「イエス降世以前にも世にハ理想ハ幾らもあつて、人々は良き模範なきが為に滅びたのでハな以、之に到達する力のな以のに苦しんだ」のであつて、「基督教をして其理想を揚げながら、之に到達の途を示さなければ……基督教も衆生救済の能力なきものとして棄てらるべきものである」と断定する。しかし吉岡にとつて「されど神に感謝すべきことハ基督教ハ此問題を解決し得るのである」。吉岡によれば「吾々の模範たるイエスハ又吾々の新生命である。Dr. Stalken（ママ）の所説を借りて言ふと、子供が母親に似るのハ……子供が常に母親に目を注ぎで居て故意（ママ）と之を模倣（ママ）る」ためというよりも、「子供の生命ハ母親の生命である」からである。つまり「母親が子供の内部に在て生きて居るからである」との比喻を挙げて、「イエスと基督者との関係を示すものである」と。その上で「信仰によりてキリストを汝らの心に住ませ給はんことを」（エペソ人への手紙、第三章一七節）、「汝らの裏にキリストの形成らんことを」（ガラテヤ人への手紙、第四章一九節）「最早われ（現実我）生くる

にあらず、キリスト（理想我）我が内に在りて生くるなり」（ガラテヤ人への手紙、第二章二〇節）との聖句を挙げて、「ここにイエスと自己の真の一致、融合があるのでありて、これが即天の父の聖旨である。イエスの福音の奥義ハ実はこの、にあるので吾々ハイエスの内住を得て完全にイエスの模範に倣ふことができるのである」と。

この「イエスの模範」に現れた吉岡のキリスト教観は以下のものである。まず、「天」と「天地」とを区別しなかった中村や、「天」が「天地」の創造者であり、運営・経営している存在であり、その点で「天<sup>(70)</sup>神」であると考え、『天道溯原』のマーティンとは異なり、吉岡は「天」を「天地<sup>(71)</sup>」と捉え、「父上」である神とを区別している。従って、吉岡にとっては「敬う」対象は「天」ではなく「神」でなければならなかったと言える。それゆえ一九三一年に吉岡が「天を畏れて自己を修め、愛と誠と敬を以て人を遇し、もつて人類の向上に力をいたす、これ即吾人の地上に於ける生活を有意義ならしむる所以にして真の快樂はその中に存て存す」と書いたとき、その「天」は「神」を意味していると考えられる。

さらに、「先ツ有ゆる人間の中でイエスハ」と語る吉岡は、イエスを「神」であるとともに人間と捉えている。その点で、彼のイエス理解はユニテリアンのイエス理解とは違っている。<sup>(72)</sup> イエスは「円満完全にして欠陥なき性格」を有する点で「神」の性格をもつものと考えていたと思われるからである。中村とは異なり、吉岡にとってイエスの存在はキリスト教の信仰上不可欠な存在であり、キリスト者が「模範」とすべき対象であった。だからそこ、吉岡によれば、イエスの福音の奥義とはキリスト者の信仰の対象であり、かつ「円満完全にして欠陥なき性格」をもつ「イエスの内住を得て始めて完全にイエスの模範に倣ふこと」であり、それによって「イエス

と自己の真の一致、融合」が可能となるのである。そしてこれこそが「天の父の聖旨」だとい<sup>(24)</sup>う。

## 【注】

(1) 井上琢智「吉岡美国と敬神愛人」(5)、『関西学院史紀要』第一〇号、二〇〇四、七九〇頁。他人の詩句・語句などを引用し、揮毫する際には「書」と但し書きをすという当時の文人の常識を踏まえて吉岡は「敬天愛人」を揮毫する際には「書」の但し書きを付けたのに対して、「敬神愛人」の語句を揮毫するに際しては、その但し書きを付けることはなかった。

(2) 中村正直における「敬天愛人」思想の変遷についてのもっとも詳細な研究が、小泉仰『中村敬宇とキリスト教』(北樹出版、一九九二)である。本稿の執筆に際して、同書およびその基礎となった小泉の以下の諸論考を参照した。記して感謝申し上げます。(一)「敬天より敬天愛人へ」『日本思想史講座八巻、近代の思想3』雄山閣、一九七七年)、(二)「中村敬宇における『天』と『神』との出会い」(『比較思想のすすめ』ミネルヴァ書房、一九七九)、(三)「啓蒙思想家の宗教観」(共著『人間と宗教―近代日本人の宗教観―』東洋文化出版、一九八二)。その他、沢田鈴歳・増村宏「中村正直の敬天愛人」(鹿児島大学『史学』第一九号、一九七一、五二頁)、高橋昌郎『中村敬宇』(吉川弘文館、一九六六、再版一九八八)、荻原隆『中村敬宇―明治啓蒙思想と理想主義―』(早稲田大学出版部、一九九〇)などがある。なお、荻原は「敬宇は儒者時代から仏教に対しては相当好意的であったものの、そこは儒教を信奉するものとして全面的に仏教に賛同するわけにはいかなかった」(二二四頁)と書き、批判点として「(一)宇宙生成に関する問題、(二)彼岸と此岸(つまり宗教か道徳か)の問題、(三)因果広報の問題」を検討している。

(3) 鈴木恭子著・渡部リン校閲「G・カックラン」『近代文学研究叢書』第五巻、昭和女子大学、一九五七、二四一―七六頁。武内博編著『来日西洋人名事典』日外アソシエーツ、一九八三。

(4) 生徒には、山中笑、土屋彦六、村松一などがおり、山中ら一名に洗礼を与えた。最初のメソヂスト派の受洗者であった。彼は、他に一八七八年には静岡病院の顧問に、また静岡師範学校附属中学校の教員にも

なった。一八七八年一時帰国し、七九年一二月再び来日した。なお、以下のコ克蘭の動向については、鈴木著・渡部校閲前掲書、二四四頁以下を参照のこと。

(5) 松信太郎編『横浜近代史総合年表』有隣堂、一九八九。

(6) コ克蘭との出会い以前にも、中村は横浜や静岡で宣教師との交流を行っていた。横浜山手四八番館のミッション・ホーム（共立女学校の前身）を開いたアメリカ婦人一致伝道教会派遣の三名の婦人宣教師や静岡伝習所の物理・化学教師として招かれ、バイブルクラスをも開いたE・W・クラークなどであった。帰国に際して（一八七五）、クラークは中村にオックスフォード版福音書四冊を送った（高橋昌郎前掲書、八五～九五頁）。

一八八四年コ克蘭は再び来日し、神学教育に従事することとなった。すなわち、その三月には麻布鳥居坂町一三番地に小林光泰を設立者とする東洋英和学校を創立し、本人はその校長となった。当初、初等科・中等科・高等科であり、創立時、一二名であった入学者も、一八八六年には四百名を越え、九月には神学部が創設された。しかし、明治二〇年代の欧化主義の衰退とともに、キリスト教教育を理想とした平岩愼保校長の改革は挫折し、一八九三年に平岩に代わって江原素六が校長に就任した。その直前に健康を害したコ克蘭は帰国。帰国後、トロント年会の議長に選ばれた。その後、コ克蘭はロスアンゼルスへ移り、一八九三年から一九〇〇年の間、南カルフォルニア大学で哲学と経済学を教え、最後の一年は文学部長を勤めた。一方、一八九六年から一八九八年にはマクレイ神学校で学部長として神学教育を担当し、一九〇一年五月二四日に死亡した。一八九三年には、東洋英和学校は尋常中学校を創設し、東洋英和学校から分離して麻布尋常中学校と名称変更を行い、実質的にキリスト教主義教育から離脱した。このような流れに竿をさしたのが、一八九九年に発せられた文部省訓令第一二号であった。これにより、東洋英和学校の神学部すら、廃校せざるを得なくなった（『関西学院百年史 通史編Ⅰ』一九九七、二一七～九二頁）。なお、関西学院大学図書館には、東洋英和学校より寄贈された図書約六百冊弱（原簿番号四三六四～四九七八（但し、番号中書店から購入したものも含まれている））が今なお所蔵されている。

- (7) 小泉仰前掲書、一五頁。「論学弊疏」(一八五四―一五九頁、『敬文文集』所収)による。
- (8) 小泉仰前掲書、一六頁。「洋学の禁よろしく除くべし」(一八五四、『敬宇文稿甲寅文稿』所収)による。
- (9) 小泉仰前掲書、一七頁。「洋学論」(一八五八、『敬宇文稿雜文』所収)による。
- (10) 石井民司(研堂)『自助的人物典型 中村正直伝』成功雜誌社、一九〇七、四二頁。
- (11) 大久保利謙編『明治啓蒙思想集』筑摩書房、一九六七、二七九頁。
- (12) 小泉仰前掲書、二二頁。『西国立志編後』大久保利謙編前掲書、二八六頁。
- (13) クラークは勝安房の依頼によりグリフィス (W.E. Griffiths, 1843-1928) の紹介で来日、静岡藩教師(一八七二―七三)、次いで東京開成学校教師(一八七三―七四)となり、一旦帰国(一八七五)後再来日した。
- (14) 小泉仰前掲書、四〇―四二頁。なお、荻原によれば、「もともと敬は原始儒教においては『敬天』として使われ、一つの対象性をもっていた。この敬を道德的なつつしみの態度を示す言葉として転用したのは朱子学であるが、儒者時代の敬宇はこの立場に従っている。『敬天』という原始儒教的敬が出てくるのは、維新後になつてからである」(荻原隆前掲書、二二二頁)。その上で荻原は「敬宇の禍福を主宰する天も、少なくとも後のたとえば『報償論』(一八八八)等の神と比べると意志的な応報性が弱い、従つて人格性もやや弱い」(荻原隆前掲書、二二二頁)と指摘している。しかし敬宇の「天」が「意志的な応報性が弱く」「人格性も弱い」としても対象性をもっていたがゆえに、キリスト教を受け入れる下地があった。
- (15) 小泉仰前掲書、三三頁。小泉は「藤樹の一神教的、人格的天思想は、陽明学派の人々に陰なり陽なり影響を与え続けてきた。このことは、また、明治維新を迎えたとき、新たにキリスト教を受容した人々の中に、陽明学を学んだ人々が多かつたこととも関連しているように思われる」(前掲書、三四頁)と指摘する。注目すべきは、この中江藤樹の最初の妻久子がキリシタン大名であった木下勝俊の孫娘であったこと、藤樹が久子を娶つてから神を祭る決心をし、久子の死によって祭るのを止めたという事実をヒントに「キリシタン久子」を想定して藤樹の生涯を描いた小説が淵田隆雄『天命の人小説 中江藤樹』(二〇〇一、私家版)である。藤樹が説いた思想を端的に示した字句が「致良知」と「愛敬」であった。

- (16) 小泉仰前掲書、四一頁。  
 (17) 小泉仰前掲書、四二頁。  
 (18) 小泉仰前掲書、四二頁。  
 (19) 小泉仰前掲書、四二頁。  
 (20) 小泉仰前掲書、四三頁。荻原によれば「報恩的觀念と裏腹になるが、敬宇は人の幸不幸をどこまでも彼自身の道徳的行為に求めた……従って、敬宇は神を信ずることによって救われるという思想がどうしても彼自身のみこめない。この点でも彼は儒学的思想を維持している」(荻原隆前掲書、二二〇頁)。

(21) 小泉仰前掲書、六一頁。

(22) 小泉仰前掲書、六一〜六二頁。

(23) 小泉仰前掲書、六三頁。

(24) 小泉仰前掲書、六五頁。小泉はJ・S・ミルの『自由之理』(二八七二)の邦訳出版の際に付けられた「序」に現れた中村のキリスト教観に注目し、それが『敬天愛人説』での主張が詳しく繰り返されていると指摘している。そこでは「上帝つまり神は、我と人とを造った創造主であるから、神によって造られた我が身を愛するという自愛は、自然に起こってくる愛であり、しかも、創造主の愛するものを愛するわけである。それは神を愛するのと同じである。その自愛は、同じく神の造った他者を愛する愛人と共通である」(小泉仰前掲書、六九頁)と主張している。小泉はこの「序」が『自由之理』に「ふさわしくない文章」と指摘している。しかし、ミルがこの論文を書くに当たって「この論文の主題は、哲学的必然という誤った名前を冠せられている学説に実に不幸にも対立させられているところの、いわゆる意志の自由ではなく」(塩尻公明、木村健康訳『自由論』岩波文庫、一九七一、九頁)と書いていることに着目すれば、必ずしも中村のこの「序」が「ふさわしくない文章」だとは言えないであろう。小泉は指摘していないが(利用した版の問題もあるが)、『E.W.C. Shidz-u-o-ka Jan. 27th 1872』との記述のあるINTRODUCTIONが含まれている。この序文の筆者はE・W・クラークであり、その序文の最後に“glorious liberty of the children

of God!」とあるように、この「序」はキリスト教の視点から書かれている。この問題についての詳細は別稿に譲らざるを得ない。

なお、中村に大きな影響を与えたエマソンについては、本学高等学部文科英文学科卒業生で関西学院大文学部教授志賀勝の『エマソン』（養徳社、一九四八）がある（『関西学院事典』、学校法人関西学院、二〇〇一、二三四頁参照のこと）。

- (25) 関西学院大学図書館には『天道溯源』（一八七五）関連図書として以下が所蔵されている。(1)米国丁建良著・嘉魯日耳士訳『天道溯源解』明治八年版・一九九九年版嘉魯日耳士蔵版（この一九九九年版は旧大阪教会の高吉太郎蔵書である）。なお、「敬神愛人」の語句は、「馬太伝二曰ク一心一性一意主爾ノ神ヲ愛ス可シ是誠ノ首ニシテ大ナル者ナリ其次ハ人ヲ愛スル己ノ如シニノ者ハ律法先知ノ綱領ナリ夫真神ノ誠十條アリ其要旨ヲ求ムルニ神ヲ愛シ人ヲ愛スル兩端ニシテ尽セリ」（四三丁）とある。(2)米国丁建良著・日本中村正直訓点『天道溯源』明治一三年四月版・倫敦聖教書類会社刊行（吉岡美国所蔵本）。(3)『啓蒙天道溯源』題辭、中村敬宇（明治一五年六月）、序、フルベッキ（高橋吾良〔五郎〕訳）、出版、美以美教書類会社、出版年、明治一八年、明治二二年（関西学院大学図書館蔵版は表紙に二二年、表表紙一八年と書かれたもの。また、本蔵書は、原簿番号一〇七八とあり、「書籍館、関西学院、神学部」と書かれた所蔵ラベルが張ってあるので、原田の森時代の蔵書であることが分かる）。なお、『天道溯源』の主として文献的研究としては、吉田寅『中国キリスト教伝道文書の研究』（汲古書院、一九九三）がある。

- (26) 小泉仰前掲書、七八〜七九頁。

- (27) 『天道溯源』中巻第六章（三七葉）。小泉は詳細な分析を通じて『敬天愛人説』の中心的な主張は、『天道溯源』に発見されるのである。したがってすでに明治元年には、敬宇はこの本を読んでいたのではないかと推察される」としている（小泉仰前掲書、八〇頁）。ただ、彼が受け入れなかった思想として、小泉は①復活思想、②聖霊論、③信仰義認論を挙げている。

- (28) 小野述信『神教要旨』（明治二年六月）は、①復古神道の造化三神を「天照大神」に一体化する、つまり

多神教的性格を「天照大神」によって克服することによって、神道をキリスト教的一神教と同一の世界観に立脚させることができたし、②彼岸的・来世的性格を与え、③「天照大神」に現世における善悪を審判する役割を与えることで、神道の神に「裁きの神」としての役割を与えようと試みた（羽賀祥二『明治維新と宗教』筑摩書房、一九九四、一六七～一六八頁）。

- (29) この上帝という用語は古代中国の儒学的伝統の中で用いられている用語で、第三者的超越者を示しているため、マーティンはこの用語を用いず、代わりに「天父」を用い、「神と人との間の父子的人格関係」を示そうとした。なお、柳文章『ゴッドと上帝』（筑摩書房、一九八六）は、イギリス人宣教師モリソン（Robert Morrison）訳『神天聖書』（一八二三）の改訳に際して起こった用語論争（Godの訳語を「神」（支持したのはアメリカ人宣教師）とするか、「上帝」（支持したのはイギリス人宣教師）とするかをめぐる論争）に言及し、聖書の日本語訳の原典となった中国語訳は「神」を訳語するモリソン訳の流れを汲むアメリカ人宣教師ブリッジマン（E.C.Bridgman）＝カルバート（M.S.Culbertson）訳であり、Godの日本語訳である「神」もアメリカ人宣教師主導で進められ、中国では問題となった用語論争はなく、すんなりと受け入れられた、と指摘している。さらに進めて柳文章は「問題にされなかったことは、すなわち問題であって、中国語『神』（shén）と、日本語の『神』（かみ）とは同じではない」にもかかわらず「中国も日本も文字の形が同じで、日本でもやはり礼拝の対象だ、ということだけを見て、それ以上の意味など考えなかった。分らなかったのである」と指摘している。なお、前島潔「日本語に於ける基督教用語『神』に就いて」（『神学研究』第二九卷第六号、一九三八）を参照のこと。また、津田左右吉もやまと言葉の「カミ」と中国語の「神」とのズレが問題を引き起こした点を指摘し、「日本の上代に神権政治（セオクラシイ）が行われてきたという俗説が知識人の間に生じたのも、一つはそのためであるまいか」と批判している（『日本語雑感』『津田左右吉全集』第二二卷、岩波書店、一九六五、六九～七〇頁）。

- (30) 小泉仰前掲書、八六～八七頁。

- (31) その他、小泉は『敬天愛人説』、『請質所聞』におけるキーワードを分析し、『天道溯原』に登場する十字架、

十字、彌施訶<sup>ミシヤ</sup>、聖靈、贖罪、天使、予言、福音、天使といった言葉がそこに登場しないことを指摘し、中村がこれらの概念に関心をもたなかったと指摘している(八七頁)。なお、高橋も『請質所聞』の言葉「曰ク天、曰ク上帝、曰ク神、真一神ヲ謂フ。鬼神ノ神ト混ズ可ラズ。曰ク、造化ノ主宰ト、名異ニシテ義一ナリ」に注目している(高橋昌郎前掲書、68頁)。

(32) 小泉によれば、この中村のユニテリアニズムとの類似は、洗礼時にすでに見られるものであり、ユニテリアン教会の牧師を辞して、自由思想家として活躍したエマソンへの共鳴も、これが原因の一つだと推察している(小泉仰前掲書、九一頁)。

(33) 小泉仰前掲書、九二頁。このような意味での「敬天愛人」思想は、中村の書いた「欧亜記程序」(『敬宇文集』卷之八)、「萱水杉浦翁墓碣序」(『敬宇文集』卷之十)、「啓蒙修身要訓序」(『敬宇文集』卷之十)で具体的に示されており、「天を敬し、自己が道徳的に修養して、社会に奉仕を行いさえすれば、天は人を助け、人は他者を助けることができる」(小泉仰前掲書、九四頁)との考えからを描いている。その点で、S・スマイルズ『西国立志編』も同趣旨の思想を普及するために邦訳出版されたものと考ええることは可能である。具体的には、例えばその思想は「今の女王は尋常の老婦にて、飴を含んで孫を弄するに過ぎざるのみ。しこうして百姓の議會、権最も重し。諸候の議會、これに亜ぐ。その衆に掄ばれ、民委官たる者、必ず学明らかに行い修まれるの人なり。天を敬し人を愛するの心ある者なり」(講談社学術文庫、一九八一、五三頁)。また、「余また近ごろ西国古今の僥傑の伝記を読み、そのみな自主自立の志しあり、艱難辛苦の行いあり、天を敬人を愛するの誠意に原づき、もつてよく世を済民を利するの大業を立つるを觀て、ますますもつてかの土文教昌明、名四海に揚がる者は、実にその黒人勤勉忍耐の力によりて、その君主は得て与らざることを知るあるなり」(五四頁)などに読みとることができる。この点に関して次の中村の題辭は注目に値するであろう。「神はこれ一つ、觀る形なし。神は靈であり、大地聡明で仁愛深し。宇宙の巧みな作り物であり、純粹無垢。人の務めは敬虔にあたるべし。当に神を愛し、人も愛すべし。忠と孝を尽し、君と親に仕える。蒙を開き、愚を啓発、貧困者を救済する。傲慢を除き、謙虚でいく。怠惰を除き、勤勉

につとむ。心を清め寡欲にし、万事やすらからで身体健康となり。天の国は近し、樂もそこにあり」(『啓蒙天道溯原』(原文漢文))。

(34) 増村宏「西郷隆盛の思想について(一)―陳竜川のこと、敬天愛人のこと―」鹿兒島大学法文学部『文学科論集』第七号、一九七二。

(35) 『西郷南州遺訓』山田済齋編、岩波文庫、一九三九、一九九三、一二二頁。また『南洲全集』山路愛山編、一九一五、春陽堂、五五五頁。

(36) 前掲書『西郷南州遺訓』一三頁。前掲書『南洲全集』五五六頁。

(37) 前掲書『西郷南州遺訓』一三頁。前掲書『南洲全集』五五六頁。

(38) 小泉仰前掲書、九四頁。

(39) 海後宗臣『教育勅語成立史』(『海後宗臣著作集』第一〇巻、東京書籍、一九八一)。中村の草案の趣旨は「忠孝をもつて人倫のもととし、その根源を天に求め、敬天尊神の心が人間の本性であるとし、人間の心には神があるので独りを慎み、清浄純正にしなければならない。皇国の臣民たるものは忠君愛国、神器信愛智徳併進、品行完全なものとなり、一身、一家、社会の福祉のために艱難辛苦して努めなければならない」(二八三頁)。特徴的なのは中村の草案が「君父の前に天や神を置いて、道徳の根元を宗教的なものに求めた」(二八九頁)ことである。

また、この点については、梅溪昇『教育勅語成立史―天皇制国家観の成立(下)―』(青史出版、二〇〇〇)を参照のこと。なお、本書は『軍人勅諭成立史―天皇制国家観の成立(上)―』とともに「天皇制国家観の成立史研究を構成している。

(40) 高橋昌郎前掲書、二五一頁。中村の第一草案には「忠孝ノ心ハ天ヲ畏ル、ノ心ニ出テ天ヲ畏ル、ノ心ハ人、固有ノ性ニ生スサレバ天ヲ畏ル、ノ心ハ即チ神ヲ敬フノ心ニシテ」(海後宗臣前掲書、二四六頁)とある。

(41) 小泉仰前掲書、一二四頁。なお、この小泉の最晩年の宗教観を明治二〇年二月八日および三二日に記された七言律詩(「敬宇日乗」六)に求めている。

- (42) 海後宗臣前掲書、二九五頁。教育勅語とキリスト教との思想的葛藤については、副田義也『教育勅語の社会史―ナリヨナリズムの創出と挫折―』(有信堂高文社、一九九七) 第三章『教育勅語』をめぐる諸思想の葛藤』を参照のこと。
- (43) 『永井柳太郎』発売、勁草書房、一九五九、一六九頁。なお、京都セラミック(現、京セラ)の創業者稲盛和夫はその創業にあたって同郷(西郷隆盛は鍛冶屋町、稲盛はその地から一キロメートル離れた薬師(現、城西)町)の先輩西郷隆盛の「敬天愛人」を社是とした。稲盛はこの「敬天愛人」を「自然の道理」であり、「仏教でいう解脱」をした西郷が生涯貫いた信条を示す言葉と理解し、「西郷さんは無欲だったから、天の声が聞こえたのです。ほんの一瞬でもいい。私利私欲、自分を捨てられる人」を西郷に見たのである(『讀賣新聞』二〇〇三年三月二七日、夕刊)。なお、この記事によれば、西郷の自筆の「敬天愛人」の書は現在九枚確認されているという。また、稲盛和夫「敬天愛人―西郷南洲遺訓と我が経営―」第一講(第一三講(『日経ビジネス』二〇〇五年一〇月三日号)二〇〇六年一月二日号)も参照のこと。
- (44) 井上琢智前掲論文「吉岡美国と敬神愛人」(5)、七九〜八〇頁。
- (45) 『中学時報』第一八号、一九二九年二月五日、一頁。
- (46) 『中学時報』第二三三号、一九三二年七月一五日、三頁。
- (47) 「日は好日」「日の出」一九三三年二月(前掲書『永井柳太郎』(二二二頁)からの引用)。
- (48) 吉岡美清編『父の傍』一九五八、私家版、八八〜八九頁(中村賢二郎の発言)。
- (49) 吉岡美清編前掲書、一〜二頁(吉岡美清の発言)。
- (50) 関西学院『関西学院六〇年史』、一九四九、八九〜九〇頁。
- (51) 井上琢智前掲論文「吉岡美国と敬神愛人」(5)、八〇〜八一頁。
- (52) 同じ質問を受けたのは以下の人びとであるが、「敬神愛人」を挙げたのは吉岡ただ一人であり、「敬天愛人」を挙げた人はただ一人としていない。笹森宇一郎、木原外七、釘宮辰生(「純クリスチャン」)、国澤義之助、古坂啓之助、古澤繁次郎、中村金次、柳原浪夫(「一心不乱」)、大田義三郎(「聖旨を奉ず」)、松本益吉(「至

誠)、値賀虎之助、吉崎彦一(「誠実、不動」、三戸吉太郎(路加伝一〇章第二七節)、西條寛雄、村田重次、シユワルツ、平田平三、山中笑、川澄明敏、池田徳松、栗村左衛八、川合錠治、ベリー、橋本睦之、竹田虎作、山田寅之助、舟橋雄、山鹿旗之進(「天に在す我儕の父」、平岩愼保(「忠誠」)、別所梅之助、石田良助、平川方舟、長谷川朝吉、吉崎俊雄、小畑久五郎、相原英賢、左近義弼、米山定昌、波多野伝四郎、中川邦三郎。

なお、吉岡はこのアンケートで「約翰第一書、加拉太書等を特に愛読す」と書いているが、一九三〇年の高等商業学部第一五回卒業アルバムに挙げられて卒業生へ贈る言葉として、「愛は寛容にして慈悲あり、愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず、非礼を行はず、自己の利を求めず、憤ほらず、人の悪を念はず、不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、凡そ事を忍び、おほよそ事信じ、おほよそ事耐ふるなり」(コリント人への第一の手紙、第三章第四節、第七節)を引用している(井上琢智前掲論文「吉岡美国と敬神愛人」(5)、八六頁、九四頁)。

また、『護教』(明治四二年一〇月三〇日、第九五三号)の特集「如何なる書籍に由て基督教の思想に接触せしや」との質問に対して、吉岡は「天道溯原。真理一班。六合雜誌」を挙げている。同じ質問を受けたのは以下の人びとであり、『天道溯原』を挙げたのは山鹿旗之進、相原英賢、山田寅之助、杉原成義、松本益吉、高木壬太郎、石坂亀治、浅田栄次、三戸吉太郎、二宮安次、山鹿元次郎、星野光多、小畑久五郎、小松武治、宮地友次郎、飯沼正己、三浦泰一郎、福田錠二、岡田哲蔵、山路弥吉、加藤萬治、高野丈三、落合吉之助、古坂啓之助、河合禎三、中島力三郎、石川和助(二八名)であり、もつとも多い。このように『天道溯原』がキリスト教入信にもつとも大きな影響を与えた著書であったことが分かる(この点については、吉田寅前掲書『中国キリスト教伝道文書の研究』第Ⅱ部第五節「『天道溯原』と日本のキリスト教伝道」(二〇八〜一六頁)を参照のこと)。なお、中村の著書の中で挙げられている書物には、「擬泰西人上書」(二名)、「勸善訓蒙」(四名)、『西国立志編』(四名)、「我は神あるを信ず」(一名)である。他に、植村正久「真理一班」(一五名)、中村正直『格物探源』(六名)が挙げられている。

本多庸一（支那訳旧約全書）、山鹿旗之進、別所梅之助、平岩愼保（中村敬宇「擬泰西人上書」）、相原、山田、須永健三、杉原、山本、松本、高木、石坂、浅田、原田助、柏井園、平田平三、渡辺澤次郎、秦庄吉、高井貞直、三戸、貴山幸次郎、二宮、山鹿、中川邦三郎、星野、古澤繁治郎、三浦金吉、小畑、小松、宮地、飯沼、加藤新太郎、三浦、尾島真治、福田、岡田、山路、加藤、高野、落合、田島進、松本越、笹森宇一郎、栗村左衛八、古坂、普賢寺轍吉、河合、中島、熊野雄七、石川、宮之原信次郎、鶴崎庚午郎である。

(53) 関西学院学院史編纂室には『訓点 天道溯原』（一八六〇年版、敬虔社蔵版、学院史編纂室所蔵番号 Z 一  
一九、T I）がある。また、『天道溯原』（一八八六、倫敦聖教書類会社刊行、横浜製紙分社印刷、洋本）。また、『天道溯原解』は嘉魯日耳士蔵版である。吉岡の旧蔵書で現在は大学図書館所蔵となっているのが、中村正直『自由之理』（一八七七年三月版權、木平讓蔵版）である。

(54) 東奥義塾史編纂委員会『東奥義塾史報』第五号、二〇〇〇。東奥義塾は弘前藩藩校であった稽古館を継承して一八七二年一月二三日開学した学校である（『東奥義塾九十年史』一九六七）。当校はこの「敬神愛人」を「校訓」としている。東奥義塾は、「敬神とは『神を畏れることは、知識の始めである』（箴言、第一章七節）にもとづくもので、神を敬い神の意志に服従することを、人間形成の根本としている」と、「愛人」を「自分自身を愛するように、隣人を愛しなさい」（マタイによる福音書、第二章三九節）と理解している。

(55) 名古屋学院『名古屋学院 一八八七〜一九六七』写真に見る八〇年の歩み』一九六七。名古屋学院『名古屋学院史』一九六一、一六頁。クラインについては西村清「横浜時代の F・C・クライン」名古屋学院創立の人となり』（『名古屋学院論叢』一九七七、一〜二七頁）。なお、奥野（一八二三〜一九一〇）は幕医の三男として生まれ、J・C・ヘボンの日本語教師を務め（一八七二）、『和英語林集成』二版以降の編集・増訂に参加。J・H・バラの説教に感動し、S・R・ブラウンから受洗した。ところで、クラインは、私立愛知英語学校着任以前、横浜英和学校男子部（一八九一年まで存続し、後に横浜英語専修学校として再発足したが、関東大震災直後に廃校）の校長であった。この学校はブリタン（H.G. Britan, 1822-97）が横浜に創立した現在の成美学園の前身となる学校の男子校で、クラインとブリタンの対立から分離した。

また、横須賀学院も教訓として「敬神・愛人」をあげている（『横須賀学院五〇年記念誌』二〇〇〇）。

「敬神愛人」の語句が軍事教育のために利用されていた好例が前掲書『名古屋学院』掲載の写真に見ることが出来る。その授業中の写真には、黒板の右から「軍神牧野中佐 敬神愛人 尊皇殉国」と書かれ、牧野と思われる大きな写真が置かれている。おそらく、真珠湾攻撃で戦死した同窓生牧野中佐を「軍神」とし、「尊皇殉国」の事例に揚げ、その精神を「敬神愛人」にあると教えたのであろう。

(56) 東北学院『東北学院資料室』創刊号、二〇〇一。なお、巖谷一六（一八三四～一九〇五）は、近江生まれの政治家で書家であった。一八九一年貴族院議員に勅撰された。なぜ、彼に揮毫を依頼したか不明。

(57) 『関西文壇』第七号、一九〇九年。

(58) 『関西文壇』第七号、四～五頁。

(59) 『関西文壇』第七号、六～七頁。

(60) 橋本淳「関西学院の芦田慶治教授」『キリスト教主義教育研究室年報』第六号、一九七八、一九頁。このような芦田の姿勢ゆえに「芦田の学問と信仰の展開は、この事柄の歴史的な分析を伴った客観的論証と、それをわがものとして信仰を今に生きる葛藤」となり、「宗教史学派に接近し、あるいはトレルチ、ウオツバミン、オイケン等に共感し、最後には大きく方向転回してバルト神学へと傾向していく」と指摘している。

(61) 『中学時報』第二三三三号、一九三二年七月一五日、二〇頁。

(62) 井上琢智前掲論文「吉岡美国と敬神愛人」（5）、八四～八九頁。なお、その後の調査で吉岡の手になる揮毫書「信能勝世」（七十七翁 甲東書、法学部チャペル）の存在が明らかになった。

(63) 『新星』第一号、一九三五年七月。なお、この文言に続いて「信仰と希望と愛と此の三ツの者は限りなく在らん。而して其のうち最も大はるは愛なり」（コリント人への第一の手紙、第二三章第一三節）が引用されていることから考えると、この「敬神愛人」を含む文章が吉岡によって書かれた可能性はある（井上琢智前掲論文「吉岡美国と敬神愛人」（5）、九〇頁、九七頁）。

(64) 荻原隆前掲書、二二七頁。

- (65) 井上琢智前掲論文「吉岡美国と敬神愛人」(1)、『関西学院史紀要』第六号、二〇〇〇、一八頁。なお、興味深いことに、中村は母が日蓮宗本伝寺に祈願して生まれた子どもであるということである(高橋昌郎前掲書『中村敬宇』二頁)。
- (66) 『新星』第五号、一九三七、一七〇二四頁(ただし、文責は中村謙介である)。
- (67) 井上琢智前掲論文「吉岡美国と敬神愛人」(1)、二二頁。
- (68) この草稿は「Kwansei Gakuin KOBE」および「K・G」と三日月が印刷されたいわゆるレター・ヘッドをもつ八葉に書かれたものである(関西学院史編纂室所蔵番号AA—1—YY)。この校章は、一八九四年九月に生徒が提案した三日月と教員から提案されたK・Gを併せて作成されたものである(前掲書『関西学院事典』一〇六頁)。従って、この説教は関西学院が西宮へ移転する一九二九年までのものと考えられる。この説教の日付について、本文中に「一千九百年を離れ」とあることから、この時期とも推定できる。その他、その内容・執筆年月日など不明な草稿「宗教講演『模倣の生活』梗概」(関西学院史編纂室所蔵番号AA—1—YY)があり、同趣旨のことが書かれている。その要旨を吉岡は以下のように書いている。「吾人が日常本心に疚しい所なき生活を営みたい願望を胸に満たしつゝ、其の実行に苦しんで居るが之が解決にハイエス、キリストの純潔なる性行を翫味模倣する外ハ以而て其の翫味模倣する方法ハ如何と云ふ筋合を講話する積りであります」とある。この草稿本文は四百字詰め原稿用紙(縦書き)八枚に書かれている。
- (69) 吉岡はその根拠として以下の聖書を挙げている。『この世の君きたる、されど彼ハ我に対して何の権もなし』(ヨハネによる福音書、第一四章三〇節)『我つねに御意に適ふことを行ふ』(ヨハネによる福音書、第八章二九節)
- (70) Dr. Stalken は現在のところ不明である。
- (71) 小泉仰前掲書、七六〇七七頁。
- (72) 高等商業学部第一六回(一九三一)卒業アルバム(井上琢智前掲論文「吉岡美国と敬神愛人」(5)、八六〇八八頁)。

(73) 小泉仰前掲書、九二頁。

(74) 吉岡が遺した「講義ノート(関西学院史編纂室…所蔵番号…AA—二—YY)」には以下のような記述がある。

(一葉)

天上ニハ栄光、神(創造主)ニあれ

地上ニハ平和、天意ニ合へる人ニあれ

此「人」とハすべての人を云ふので、貴賤貧富の差

別なく、人種の異同ニ拘はらず、人類全体を云ふのである。

然らバ其天意ニ合へる人とハ如何なることを云ふか。

罪のなき」

心の欲する所ニ従ふて規を越へず

己の如く爾の隣を愛すべし

誘惑ニ勝つ

積極的ニ善をなす

(二葉)

斯の如く思ひ遣イ又同情ハ我が身を人の位置ニ於て

考へることであつて吾ラは皆貴賤貧富

の差別なく人間としてハ皆同じもので

あるからニハ、各々其分ニ応じ其力量ニ

相当して相互に助け合ひ譲り合つて

行くのが至当であります。

されば孔夫子ハ「己の欲せざる所ハ之を人ニ施す

ことなかれ」と教へ、イエス、キリストハ「凡て人に為

られんと思ふことハ、人にも亦その如くせよ」と

教へられました。吾々ハ須らく是の訓言を服膺して公德を養ふべきであります

この第二葉のメモで注目すべきは、儒教の教えとキリスト教との教えを連動させていることである。このメモが何時書かれたのかをはじめ、単なる覚書か、何らかの講演会・説教のためのメモか、その聞き手が誰であるかは不明である。

卒業生へのメッセージとして吉岡は「神よ、わがために清き心をつくり。わが裏になほき霊をあらたにおこしたまへ。まづ神の国と神の義とを求めよ。然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるへし」(一九二四、マタイによる福音書、第六章三三節)、「愛は寛容にして慈悲あり、愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず、非礼を行はず、自己の利を求めず、憤ほらず、人の悪を念はず、不義を喜はずして、真理の喜ぶところを喜び、凡そ事忍び、おほよそ事望み、おほよそ事耐えふるなり」(一九三〇、コリント人への第一の手紙、第一三章第四節(第七節)などの聖句だけでなく、「命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり、この始末は困る人ならでは困難を共にして、国家の大業は成し得られぬなり」(一九二七、西郷南洲遺訓)や「敬神愛人」を西郷隆盛や「尽人事候天命 Heaven helps those who help themselves」(一九三三)をスマイズル(中村正直『西国立志編』)から引用し、より世俗化されていく(井上琢智前掲論文「吉岡美国と敬神愛人」(5)、八六―八八頁)。しかし、中村のように時系列的に吉岡のキリスト教への関わりかたの変遷を論証することは困難である。とはいえ、明治期から大正初期を頂点として、彼のキリスト教思想の世俗化が進んでいるとの印象は拭い得ない。

【追加資料】これまで六回に渡って吉岡美国の生涯を可能な限り一次資料を基礎に明らかにし、彼が好んで揮毫した「敬神愛人」の語句をめぐる思想的問題を抽出し、彼のキリスト教思想もしくは信仰のあり方を可能な限り明らかにしようとした。この調査・研究の中で、彼の各地の教会、年会、日本キリスト教団での活躍とその実態を必ずしも十分には明らかにできなかった。以下は、その中でも論文執筆後入手できた資料を紹介

しておく。

(1) 献体証明書

死亡者氏名 故吉岡美國殿、受入年月日 昭和二十三年二月二六日、屍体番号一四五四、  
解剖の種類 病理解剖、御遺骨受取人住所氏名 庄ノ昌士殿

なお、庄ノ昌士は美国の孫敬子の夫で、中学部四期生(昭和二八年卒業)である。(「関学中学部時代―追想…  
矢内正一郎先生」一九九二年三月二四日)。

(2) 出版物

これまでの研究でも必ずしも明らかし、指摘されてなかったことは、関西学院内の「南メソヂスト出版社」  
の存在であり、その出版事業である。以下は、その出版事情である。

①吉岡美国編『南メソヂスト監督教会教理及条例』西灘村(兵庫県)南メソヂスト出版舎、明治二九年九  
月、二三九(八七頁)、一九cm、【請求番号】特一八―四七二

②吉岡美国編『南メソヂスト監督教会礼文』西灘村(兵庫県)南メソヂスト出版舎、明治二九年七月、  
八七頁(『南メソヂスト監督教会教理及条例』第一章「礼文」の抜き刷り)、一九cm、【請求番号】特  
一八―八六四

【出典】『国立国会図書館蔵書目録 明治期 第一編 総記・哲学・宗教』紀伊国屋書店、一九九四  
(3)吉岡美国揮毫軸・書

③「耶蘇曰尔互相愛榮不求独由神而未之榮豈能信乎 美國拝書 落款(前出①と同じもの)」

住川正彦(関西学院大学社会学部 一九七八年卒業)から関西学院へ寄贈された。なお、この聖句はヨ  
ハネによる福音書、第五章第四四節にみられる。

④「生命非貴於糧乎」(美國、落款) 関西学院史編纂室所蔵番号、PL―三―YY。

⑤「信能勝世」(七十七翁 甲東書、法学部チャペル)

【記】本論文の作成に際して、山本栄一経済学部教授に、また草稿の解読に際して、于康経済学部教授、大  
学図書館井戸田史子氏のお世話になった。記して御礼申し上げます。